

筑波大学 2020 年解答

I 時間追跡－单振動

【メモ】

- ・高校範囲で時間追跡可能な運動は、等加速度運動、单振動、速度に比例した空気抵抗の運動の3つであり、前2つはエネルギーによる解法の選択も可能。この問題では、一部時間追跡の誘導が付いているため、その問題については時間追跡で考える。

【解答】

問1 運動方程式より、

$$ma = -kx \quad \therefore \omega_1 = \sqrt{\frac{k}{m}}.$$

問2 運動方程式は、

$$\underline{ma} = -2\underline{kx}.$$

問3 運動方程式より、

$$\omega_2 = \sqrt{\frac{2k}{m}}.$$

問4 物体のエネルギー収支を考えて^{*1}、

$$\frac{1}{2}mv^2 - 0 = \int_A^0 (-2kx) dx = \frac{1}{2}kA^2 \quad \therefore v = A\sqrt{\frac{2k}{m}}.$$

問5 ばね1が x 伸びているとき、ばね3は x 伸びており、ばね2は $2x$ 縮んでいる。よって、運動方程式は、

$$\underline{ma} = -3\underline{kx}.$$

問6 公式より、

$$T = \frac{2\pi}{\omega} = 2\pi\sqrt{\frac{m}{3k}}.$$

^{*1} 物体と2つのばねを合わせた系を考えて、以下の力学的エネルギー保存則を用いてもよい。

$$\frac{1}{2}mv^2 + 0 = 0 + \frac{1}{2}kA^2 \times 2.$$

問7 物体1の位置, および速度をそれぞれ x_1, v_1 , 物体2も同様に x_2, v_2 とする. 始状態で $x_1 = +A, x_2 = -A, v_1 = v_2 = 0$ より, 物体の位置 x_1, x_2 はそれぞれ時刻 t の関数として,

$$\begin{cases} x_1 = A \cos \left(\sqrt{\frac{3k}{m}} t \right), \\ x_2 = -A \cos \left(\sqrt{\frac{3k}{m}} t \right) \end{cases}$$

と書ける. よって, 各物体の速度は,

$$\begin{cases} v_1 = -A \sqrt{\frac{3k}{m}} \sin \left(\sqrt{\frac{3k}{m}} t \right), \\ v_2 = A \sqrt{\frac{3k}{m}} \sin \left(\sqrt{\frac{3k}{m}} t \right) \end{cases}$$

となり, 2物体系の運動エネルギーは,

$$\underbrace{\frac{1}{2} m_1 v_1^2 + \frac{1}{2} m_2 v_2^2}_{=3kA^2 \sin^2 \left(\sqrt{\frac{3k}{m}} t \right)} = 3kA^2 \sin^2 \left(\sqrt{\frac{3k}{m}} t \right).$$

II 電磁誘導 — $vB\ell$, 電気回路

【メモ】

- ・静磁場中を導体棒が運動するタイプの電磁誘導.
- ・回路の状態決定は、キルヒ霍夫則、電荷保存則、素子の性質で一意に決まる.
- ・ジュー爾熱は、以下のように分類して考える.

$$J = \begin{cases} RI^2 \Delta t & (I \text{ 一定}) \\ \text{エネルギー収支から逆算} & (I \text{ 非一定}) \end{cases}$$

【解答】

問 1 公式より,

$$f = \cancel{evB}, \quad (\cancel{y \text{ 軸正方向}}).$$

問 2 素子の性質より $I = 0$ ゆえ,

$$\phi_P = 0 - R \cdot 0 = \cancel{0}.$$

問 3 公式より,

$$V = \cancel{vB\ell}, \quad (\cancel{y \text{ 軸負方向}}).$$

問 4 キルヒ霍夫則より,

$$vB\ell - RI - \frac{Q}{C} = 0.$$

ここで、素子の性質より十分時間経過で $I = 0$ ゆえ^{*2},

$$Q = \cancel{CvB\ell}.$$

問 5 $I = \frac{dQ}{dt}$, $v = 0$ より、キルヒ霍夫則は,

$$\frac{dQ}{dt} = -\frac{1}{RC}Q.$$

よって、 Q は指数関数に比例する関数形となり、初期条件 $Q(0) = vB\ell$ より、

$$Q = CvB\ell e^{-\frac{t}{RC}}.$$

^{*2} 本当はキルヒ霍夫則を微分方程式として解いて I を時刻 t の関数として求ることでわかる事実だが、受験では知識として頭に入れておく（例外もあるが、そのような場合は誘導に従えれば十分）。

以上から、

$$I = \frac{dQ}{dt} = -\frac{vB\ell}{R} e^{-\frac{t}{RC}}$$

よりグラフは (エ) であり、電流の向きは $\text{a} \rightarrow \text{b}$ である。

問 6 回路のエネルギー収支より、

$$J = -\Delta U = -\left(0 - \frac{1}{2} \frac{(CvB\ell)^2}{C}\right) = \frac{1}{2} c(vB\ell)^2.$$

問 7 公式より、

$$F = IB\ell, \quad (\text{x 軸正方向}).$$

問 8 時刻 t での導体棒の速度を u とする。キルヒ霍ッフ則、および導体棒の運動方程式より、

$$\begin{cases} uB\ell - RI - \frac{Q}{C} = 0, \\ ma = -IB\ell. \end{cases}$$

題意より、十分時間経過で $a = 0$ より、運動方程式から $I = 0$ が言え、キルヒ霍ッフ則より $Q_{\text{fin}} = Cv_0B\ell$ を得る。よって、系のエネルギー収支より、

$$\frac{1}{2}mv_0^2 + \frac{1}{2} \frac{Q_{\text{fin}}^2}{C} + J = \frac{1}{2} \frac{Q_{\text{ini}}^2}{C} \quad \therefore Q_{\text{fin}} < Q_{\text{ini}}.$$

以上から、コンデンサの帶電量は終状態よりも始状態の方が大きく、十分時間経過で $Cv_0B\ell$ に収束していくことから (ウ) のグラフが適当。

問 9 全体のエネルギー収支より、

$$J = -\Delta U - \Delta K = \frac{1}{2} C (v^2 - v_0^2) B^2 \ell^2 - \frac{1}{2} mv_0^2.$$

【補足 1】問 6 のジュール熱を直接計算

定義より、

$$J = \int_0^\infty \left(-\frac{vB\ell}{R} e^{-\frac{t}{RC}} \right)^2 R dt = \left[\frac{(vB\ell)^2}{R} \left(-\frac{RC}{2} \right) e^{-\frac{2}{RC}t} \right]_0^\infty = \frac{1}{2} C (vB\ell)^2.$$

【補足 2】問 8 を解く

$t = 0$ で $v = 0$, $Q = CvB\ell$ より、キルヒ霍ッフ則から、

時刻 t における速度を u とする。運動方程式の両辺を t で積分して、

$$\begin{aligned} m \frac{du}{dt} &= -\frac{dQ}{dt} B\ell \\ \therefore m(u - 0) &= -B\ell(Q - CvB\ell) \\ \therefore u &= -\frac{B\ell}{m}(Q - CvB\ell). \end{aligned}$$

キルヒホッフ則より、積分定数を A として、

$$\frac{dQ}{dt} = -\frac{1}{RC} \left\{ 1 + \frac{C(B\ell)^2}{m} \right\} \left\{ Q - \frac{C(B\ell)^2}{m + C(B\ell)^2} CvB\ell \right\}$$
$$\therefore Q = \frac{C(B\ell)^2}{m + C(B\ell)^2} CvB\ell + Ae^{-\frac{1}{RC} \left\{ 1 + \frac{C(B\ell)^2}{m} \right\} t}.$$

ここで、 $t = 0$ で $Q = CvB\ell$ となるように積分定数 A を選べば、

$$Q = \frac{m}{m + C(B\ell)^2} CvB\ell \left(\frac{C(B\ell)^2}{m} + e^{-\frac{1}{RC} \left\{ 1 + \frac{C(B\ell)^2}{m} \right\} t} \right).$$

なお、 $t \rightarrow \infty$ で $Q = Cv_0B\ell$ より、

$$Q(\infty) = \frac{C(B\ell)^2}{m + C(B\ell)^2} CvB\ell = Cv_0B\ell \quad \therefore v_0 = \frac{C(B\ell)^2}{m + C(B\ell)^2} v$$

と v_0 を求めることもできる。

III 固有振動一弦

【メモ】

- ・固有振動の問題は以下の手順で考察する。

- ・①装置の長さと波長を対応付ける。

$$\cdot \text{②} \left\{ \begin{array}{l} \text{弦の場合} \left\{ \begin{array}{l} v = f\lambda \\ v = \sqrt{\frac{\text{張力}}{\text{線密度}}} \end{array} \right. \\ \text{気柱の場合: } v = f\lambda \end{array} \right.$$

・反射波と定常波を形成するとき、境界条件が固定端のときは節、自由端のときは腹を形成する。

・固有振動は弦（両端節）、気柱（開管が両端腹、閉管が腹と節）のそれぞれを押さえる。気柱の固有振動において境界が自由端のとき、開口端補正を考慮する必要がある。

【解答】

問 1 それぞれ図より、

$$\begin{aligned} \frac{1}{2}\lambda_A \times 4 &= 1 \text{ m} & \therefore \lambda_A &= 0.5 \text{ m} \\ \frac{1}{2}\lambda_B \times 1 &= 0.5 \text{ m} & \therefore \lambda_B &= 1 \text{ m} \end{aligned}$$

問 2 波の基本式、および弦を伝わる波の速さの公式より、

$$f = \frac{v}{\lambda} = \frac{1}{\lambda} \sqrt{\frac{S}{\rho}}$$

つりあいより A 側、B 側の張力の大きさ S はそれぞれ $M_A g$ 、 $M_B g$ ゆえ、問 1 より、

$$\frac{1}{\lambda_A} \sqrt{\frac{M_A g}{\rho}} = \frac{1}{\lambda_B} \sqrt{\frac{M_B g}{\rho}} \quad \therefore M_B = 4M_A$$

問 3 A、B それぞれの側で次の固有振動が起こるのは、A は 5 倍振動、B は 2 倍振動であり、それぞ

れの振動数 f_A, f_B は^{*3},

$$f_A = \frac{5}{4}f_1, \quad f_B = 2f_1.$$

よって、先に固有振動が生じるのは 弦 OA の側であり、その振動数は $f_2 = \frac{5}{4}\underbrace{f_1}_{\text{A側}}$ である。

問 4 $f = \underbrace{2f_1}_{\text{A側}}$ で次に両側で定常波が生じる（A 側では 8 倍振動、B 側では 2 倍振動）。このとき、A 側では腹が 8 個の定常波が、B 側では腹が 2 個の定常波が生じる。よって、それぞれの波長は、

$$\begin{aligned} \frac{1}{2}\lambda_A \times 8 &= 1 \text{ m} & \therefore \lambda_A &= \underbrace{0.25}_{\text{m}}. \\ \frac{1}{2}\lambda_B \times 2 &= \frac{1}{2} \text{ m} & \therefore \lambda_B &= \underbrace{0.5}_{\text{m}}. \end{aligned}$$

問 5 題意より、

$$\left\{ \begin{array}{l} \frac{1}{2} \frac{v_A}{f_1} \times 4 = 1, \\ \frac{1}{2} \frac{v_A}{f_1 + 220} \times 6 = 1 \end{array} \right. \quad \therefore v_A = \underbrace{220}_{\text{m/s}}, \quad f_1 = \underbrace{440}_{\text{Hz}}.$$

問 6 基本振動ゆえ λ は一定値を取る。波の基本式、および弦を伝わる波の速さの公式、およびつりあいより、

$$\begin{aligned} f_1 + \Delta f &= \frac{1}{\lambda} \sqrt{\frac{M_B + \Delta M}{\rho} g} \\ \Delta f &= \frac{1}{\lambda} \sqrt{\frac{M_B g}{\rho} + \frac{\Delta M g}{\rho}} - \frac{1}{\lambda} \sqrt{\frac{M_B g}{\rho}} \\ &= \underbrace{\frac{1}{\lambda} \sqrt{\frac{M_B g}{\rho}}}_{=f_1} \left(\sqrt{1 + \frac{\Delta M}{M_B}} - 1 \right) \\ &\doteq f_1 \left(1 + \frac{1}{2} \frac{\Delta M}{M_B} - 1 \right) \\ &= \frac{\Delta M}{2M_B} f_1. \end{aligned}$$

^{*3} 回りくどいが次のように計算してもよい。A 側の 5 倍振動、および B 側の 2 倍振動の波長 λ_A, λ_B はそれぞれ、

$$\frac{1}{2}\lambda_A \times 5 = 1 \text{ m} \quad \therefore \lambda_A = \frac{2}{5} \text{ m}.$$

$$\frac{1}{2}\lambda_B \times 2 = \frac{1}{2} \text{ m} \quad \therefore \lambda_B = \frac{1}{2} \text{ m}.$$

A 側、B 側それぞれの波の伝わる速さをそれぞれ v_A, v_B とすると、波の基本式より $f_1 = 2v_A = 1 \cdot v_B$ ゆえ、A 側の 5 倍振動、および B 側の 2 倍振動の振動数は、

$$f_A = \frac{v_A}{2/5} = \frac{5}{4}f_1, \quad f_B = \frac{v_B}{1/2} = 2f_1.$$

問 7 与えられた数値より,

$$\Delta f = \frac{4}{\frac{100}{2M_B}} M_B \cdot 440 \text{ Hz} = 8.8 \text{ Hz}.$$

よって,

$$\begin{cases} |f_4 - 440| = 2, & \therefore f_4 = 442 \text{ Hz}, 438 \text{ Hz}, \\ |f_4 - 448.8| = 7, & \therefore f_4 = 441.8 \text{ Hz}, 455.8 \text{ Hz} \end{cases} \quad \therefore f_4 = \underline{\underline{442 \text{ Hz}}}.$$